



# 信達の歴史シリーズ

山と川の生活史

## 第5回 恋の山 吾妻山

村川 友彦 (むらかわ ともひこ)

福島県史学会  
会長



福島市の西方奥羽山脈山形県との境にそびえる吾妻山は、吾妻連峰ともいわれ、西吾妻山（標高2,035メートル）を最高峰として、一切経山（1,949メートル）、東吾妻山（1,975メートル）、中吾妻山（1,931メートル）、東大巔（1,928メートル）などからなり、那須火山帯の一部で広大な火山群である。吾妻連峰は磐梯朝日国立公園の指定を受け、豊富な高山植物が群生している。なかでも吾妻山に自生するネモトシャクナゲ（ヤエハクサンシャクナゲ）は、国指定天然記念物で県の花に指定されている。磐梯吾妻スカイラインは昭和34年（1959）11月6日に開通し吾妻小富士や浄土平な

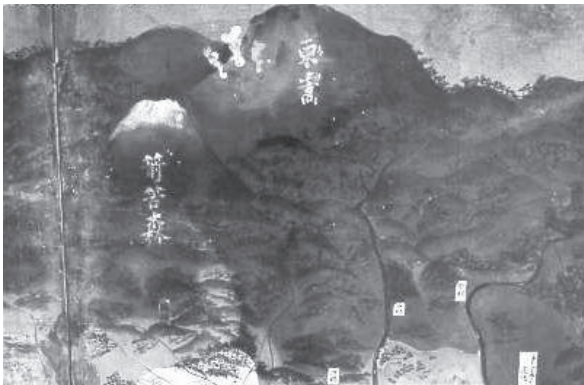
ど福島市の観光の目玉となった。

深田久弥の『日本百名山』に吾妻山について「この歴大な山群には、溪谷あり、高原あり、湖沼あり、森林あり、しかも山麓をめぐってあちこちに温泉が湧いている。包含するところの景勝は甚だ豊富であるが、それを極めつくすのは容易ではない。」と広大な吾妻山を紹介している。

江戸時代初期の「陸奥国信夫伊達惣検地高絵図屏風」（福島県歴史資料館所蔵）には、一切経山付近とみられる場所を「東嵩」とあり噴煙を上げている。また吾妻小富士は箭筈森（やはずのもり）とある。



雪の吾妻連峰 左から小富士・一切経山 右端が家形山



江戸時代初期の吾妻山風景  
小富士が箭筈森（やはずもり）とある。  
陸奥国信夫伊達惣検地高絵図屏風部分  
(安齋家寄託 福島県歴史資料館所蔵)

### 吾妻の名の起こりは？

古事記に阿豆麻也（あずまや）和名抄に阿豆万夜とあり、里の人々は吾妻山と唱えりと『信達一統志』にあることから、このように「あづま」の名は古代から使われたことが分かる。

古くは東屋嶽といわれ、東屋は四阿（あずまや）で、北家形（家形山）・南家形山（一切経山）を指すという。山の形が四阿の屋根形に似たところから山名が付いたという（『角川日本地名大辞典』7福島県）。家形山は、福島市から見ると吾妻小富士の右にまさに屋根型に見える。

### 恋の山、思いの山吾妻山

信達地方の名所として親しまれた吾妻山は、噴煙を上げる火の山であり、最近では明治26年（1893）一切経山の東南端が大爆発を起こし2人が犠牲となり、その後も小爆発や噴煙を上げ活発な火山活動が続いている。常に噴煙を上げるこの山は、詩歌の世界では情熱の恋と重ねて、男女互いに熱く燃え焦がす心を詠み、思い山と呼ばれてきた。

天保12年（1841）志田正徳が著した『信達一統志』には「東屋嶽 一名思山」「此山ハ総て硫黄山にて土中焼あかり烟絶ず 男女の情混して互に心を薫し 相思ば胸の烟立と云 此山常に烟立上り絶ざれば思山と云名を負せしなり」（『福島市史

資料叢書』第30輯<sup>しゅう</sup>信達一統志）とあり、恋焦がす思いを吾妻山になぞらえて古代から和歌に詠まれてきた。「六百番歌合」（鎌倉初期の歌合）に「浮雲を語らずとても焼火見よ思ひの山に立し煙を」（詠み人知らず）（『信達一統志』）。また『信達二郡村誌』には吾妻山大巔（西吾妻山）一名憂思山（おもいのやま）は信夫郡中第一の高山とある。吾妻山は恋の歌が数多く詠まれた恋の山である。

### 山岳信仰の山

『信達一統志』の李平の項には、「東屋嶽は村の南にあり、信達両郡第一の山で、東屋嶽神社・東屋国神社・東屋沼神社の三柱が鎮座する。」とあり、そして「北家形山と南家形山が東屋嶽神社で、その際に大なる沼があり、これを雷沼といい五色沼ともいって東屋沼神社これである。早魃<sup>かんぼつ</sup>の年この沼の辺りで雨ごいの祈りをすれば俄かに雨がふるといふ」と記されている。平安時代の延喜式神明帳に記載された信夫五社には東屋国神社、東屋沼神社がある。現在の福島市飯坂町にあり『信達一統志』入江野村の項に次のようにある。

東屋沼神社 七松大明神 延喜式内明神大社  
西山北家形南家形の間にあり大なる沼なり  
土人唱えて雷沼と云う

東屋国神社 飯坂町中野 旧築崎神社 延喜式  
内社 むかし東屋国神社 其所定ならず 後世



東屋沼神社 福島市飯坂町平野

文化年中神祝（かんなき）佐藤肥後なる人吉田殿え相達し此社を以て東屋国神社と定む 信夫五社の其一ツなり

この二つの神社は、吾妻山を神体としてそれを遥拝する場所である。広大な吾妻連峰が農耕に欠かせない水の根源であり、流れる水は裾野の集落にとっての恵みである。里人が農耕の恵みの水をもたらす山として五穀豊穡の祈る神の山として崇められてきたのである。また吾妻山神社の養蚕信仰は、信達地方が養蚕の盛んな土地であったことから、その豊作を祈る信仰に由来する。

### 修験道の聖地

家形山の上に経塚があり、法華経を一字一石に書き埋め塚を築いたと『信達一統志』にあり、また一切経山には塔婆が立てられている。

『新編会津風土記』の猪苗代の項に、本山派（天台系修験 京都聖護院門跡）の修験成就院という寺院があり、元は吾妻山の山麓寺沢という場所にて、「吾妻山白鳳寺」といった。吾妻山で修行する田舎峯入りの宿舎であったが、天仁年中（1108～1110）に成就院と名を改め、その後不動滝の下に移したとある。盛衰の後寛政11年（1799）に吾妻山修験の復興を聖護院に願い出て、その令旨により着手し、国峯大霊場と遥拝所を再興した。その勤進には、信達、田村、会津など各地に講中が結成されたとあり、各地からの修験者が集まる聖地であった。

修験者（山伏）は吾妻山入峯を田舎入峯と称して集まり、木地小屋（猪苗代町）から入山し、磐梯山より小野川そして吾妻山へ峯や沢の行場を掛け修行したという（『猪苗代町史歴史編』）。

『信達二郡村誌』の土湯村には白鳳時代のころ、吾妻権現を祀り西海子坊、松之坊、桂之坊、卒塔婆坊、榎之坊、柿之坊の六坊を設けて各地からの修行者や参詣者の宿坊にしたという。この六つの坊舎跡は不明であるが、宝暦10年（1760）その遺

跡を祭り南無阿弥陀仏の碑を杉ノ下に建てたが、大火により失われ、昭和54年に土湯温泉の熊野神社境内に有志により建てられている。

吾妻連峰の南に位置する安達太良連峰の北端にある鬼面山付近には、会津と信達地方を結ぶ交通路の会津街道がある。寛文3年（1663）には会津藩が福島へ廻米（米輸送）のため、改修工事が行われた。会津から米を運び、阿武隈川の舟運のため福島河岸へ運ぶほか、福島を通る浜からの塩など物資の牛馬による駄送が行われた。文政8年（1825）に信夫郡の92か村が協議の上、嶽地（吾妻山）は比類なき霊嶽につき牛馬などの通行を禁止することを決めているが、天保9年（1838）に幕府評定により土湯村あつかいの荷駄は牛馬等の通行を認めている。

このように吾妻山は山全体が修験道の聖地、そして行場として会津地方、中通り地方の人々から篤く信仰されその対象とされてきたのである。

吾妻山神社は耶麻郡猪苗代町大字若宮宇吾妻山にあり、猪苗代町の吾妻連峰中津川登山口から登り山頂西にある注連繩しめなわを張る大岩である。

### 温泉の宝庫吾妻山

吾妻山麓には温泉が多く分布し、福島側には野地・鷲倉・幕川・土湯・高湯・ぬる湯・信夫などの温泉、会津側には横向などのほかにも温泉が点



吾妻山麓にある仁田沼湿原の水芭蕉



福島市街地と吾妻連峰 信夫山から

在する。その中で高湯温泉と土湯温泉は、名湯として名高くその歴史も古い。

土湯温泉は、その伝説に往古大穴貴命（おおむなちのみこと 大国主命）が鉾を突いて温泉を湧き出したことから突湯と名付けられ土湯となったという。

鎌倉時代の初期の文治5年（1189）には土湯の名があることが記録にみえる。

慶長2年（1596）会津蒲生領のとき代官は湯銭を徴収し、湯銭が取られるほどの客の利用があったとみられる。翌慶長3年上杉景勝領になると、阿部薩摩により土湯の開拓が進められた。元禄16年（1703）幕領の代官池田新兵衛は湯税の免除や湯銭の引き下げ、湯小屋の整備などに取り組み、享保6年（1720）大森代官鈴木平十郎は湯屋敷の年貢の軽減や湯屋を整備し土湯温泉の繁栄に尽力したといい、顕彰碑が土湯太子堂に建っている。

高湯温泉の開祖は、縁起によると修験の行者般若坊といい俗名三四郎という人物であり、安達郡木幡の出身にて姓は菅野で父は伊達輝宗に仕えた菅野刑部国安であった。父の逝去後三四郎は伊達政宗に仕えることを決断し仙台へ向かった。途中山の中腹で休息すると、金の錫杖をもち座禅をする僧に会い温泉の基を開くようにと諭されたとい

う。三四郎は高湯温泉の開祖とされそれは慶長12年（1607）であったという（『奥州信夫郡庭坂村高湯之縁起』）。

### おわりにかえて

吾妻小富士の種蒔き兔に福島市の春の訪れを感じ、スカイラインの再開通は初夏を思わせる。吾妻おろしが吹く信達盆地は立子山の凍み豆腐に適し、寒暖の差が大きい盆地の気候は、甘い果物が実り、清く豊かな水は稲を育て豊作をもたらしている。吾妻山の恩恵を直に感じることは少ないが、長い間に私たちの生活の中に染みついている。あらためて吾妻山を眺める景色を観ると、福島市の自慢ができそうな気になる。

### 参考・引用文献

- 『福島市の町と村』「福島市史」別巻V
- 『福島市の文化』「福島市史」別巻VII
- 『猪苗代町史』歴史編
- 『新編会津風土記』第二巻 歴史春秋社
- 『奥州信夫郡庭坂村高湯之縁起』 安達屋旅館
- 『福島市史資料叢書』第18輯福島市西部各村文書
- 『福島市史資料叢書』第30輯信達一統志
- 『福島市史資料叢書』第40輯信達二郡村誌